

戦跡を歩く9

今年は、沖縄戦終結から70年目の節目を迎えます。戦争を体験した世代が高齢化する中で、戦争体験をいかに継承していくかが課題となっています。シリーズ9回目の今回は、母と姉とともに北波平から阿波根、

国吉、糸洲、小波蔵、糸満へと避難し、凄惨な戦場を目の当たりにした当時10歳の少年の体験談を紹介します。



戦争は終わっていない

大城実さんの戦争体験

●兼城国民学校

学校でのことはよく覚えていない。覚えてるのは、校長先生が恭しく教育勅語を唱え、朝礼。あとは教科と関係なく竹槍訓練をさせられたこと。これは激しかった。字ごとに軍事訓練や教練を担当する錬士がいて、米国のルーズベルトと英国のチャーチル、中国の蒋介石のわら人形を作り竹槍で刺す。一生懸命やっていたが僕は腕に落ちなかった。相手は鉄砲を持って降りてくるのに、本当に効果があるのかと聞いたら「ばかなこと考えるな」とげんこつを食らわされた。

●10・10空襲

実際に「戦争」を経験したのは1944年10月10日。あの朝、隣の先輩と一緒にマンガースのわなを仕掛けに村はずれに行っていた。突然、上空でボンボンと鳴る。見知らぬ雲が浮いていて、その間を戦闘機が飛んでいて、先輩に促されて村に帰ると、馬場で駐留兵も村の人も「演習だ！」

と騒いでいた。しばらくして、那覇の北の方から煙が上がり戦闘機がこっちにもやってきて「これは本物だ」と分かった。

●祖父母との別れ

1945年5月初めに北波平のほとんどが全焼。ほかに5、6家族とメーバンドックルと呼ばれる壕に避難した。

波平の北、武富の東側に小さな野戦病院の壕があった。祖母が艦砲が何かの破片で手をけがして、その壕で治療してもらおうとしたが、ほぼ意識不明で運ばれた兵隊を医者が邪険に扱ったのを見て「兵隊さんでもあだだからやめよう」と帰ってきたと聞かされた。

その数日後だったと思う。野戦病院が閉鎖され戦えない人は壕に残された。ある雨の日、重傷の兵隊たちが道を這いつくばって移動しているのを見た。それは僕にとって非常に衝撃的だった。学校では「日本帝国は

【クニシピラ】

左右にくねくねと折れ曲がっている道はクニシピラ（国吉坂・現在の県道250号線の一部）。写真手前側に国吉集落があり、写真中央左側は真榮里の真謝原、右上は字糸満の佐場地原、与那堀付近。写真左奥では白煙が上がっている。点々と白く見えるのは砲撃の跡。大きな砲撃穴は戦後もあちこちに残っていた。

米軍は6月11日に国吉丘陵に進撃を開始。日本軍は激しく抵抗を続けていたが、16日にはほとんどの陣地が制圧された。多くの避難民がクニシピラを越えて国吉集落に逃げ込んだが、日米の攻防戦により多くの人々が巻き添えになった。

写真／米軍撮影の1945年6月15日の国吉丘陵（県公文書館所蔵）

●心を失ったクニシピラ

阿波根から潮平、兼城へと向かい報得川を越えて照屋へ。偶然父方の本家の家族と再会し一緒にクニシピラに向かった。そこは、海からの艦砲射撃と空からの爆弾、地上戦の砲撃とで草木も何もなく道らしい道ではなかった。僕は、母のモンペの端をつかまえて歩いたが、その

時の気持ちは今でも思い出せない。砲弾が破裂すると破片と一緒に血しぶきが、時には肉片が飛んでくる。その中を怖いとも、ああ死ぬんだとも、死にたくないとも思わずに歩いた。助けを求め無数の声にも心は動かず、人間らしい心を失って登った。戦争の本場の恐ろしさを思い知らされた場所だった。

●痛みで取り戻した感情

そして糸洲、小波蔵へ。残っていた大きな砂糖小屋に避難した。ある日、突然これまでと違う激しさで砲弾が飛び交い、母はとっさに僕の頭にかぶさった。何かの破片が僕の足に当たりふくらはぎに妙な感覚がした。手を伸ばしてみると、血で真っ赤に染まり、骨が残っていなかった。

妙なことが、痛みが僕に人間らしい感情を取り戻させた。「死にたい」と。生まれる前に亡くなった「父さん」ところへ帰りたい、猫いらずを飲んで死のう」と叫んだらしい。

本家のおじが「どうせ死ぬなら自分の墓で死のう」と言い、糸満の墓へ行くことになった。母は持っていた

●人を大切にすることを

失った左足は今でも痛みを感じる。真っ暗では寝られないし、花火の音を聞くと混乱する。戦争は終わっていない、僕はそう思う。

以前、孫たちが僕の義足をみて「おじいちゃん、足どうしたの？」と言うから「戦争怪獣にやられた」と答えた。しかし戦争を引き起こすのは怪獣ではなく人間。戦場では人間は人間でなくなってしまう。人間らしい思いを失ってしまう。人間を本当に大事にする社会を築き、子どもたちに受け継がなくてはと強く思う。

大城 実さん

1934（昭和9）年トラック諸島の夏島生まれ。3歳から母の実家のある北波平で生活。戦後はハワイへ留学。沖縄キリスト教短期大学で教授・同学長を経て、現在は同特任教授として沖縄キリスト教平和研究所所長を務め、平和学の研究と発信に尽力。



過去のシリーズは、ホームページでご覧になれます。沖縄戦における糸満市の情報は、「糸満市史資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で詳しく紹介しています。問い合わせ先 生涯学習課 840・8163